

天草の開発と自然保護

熊本県・苓洋高等学校 生駒 研二

天草の自然を護ろうと、この12年『天草の自然を護る会』の事務局として活動している。この活動で知った天草の環境問題を、生徒にわかりやすく伝えるようにしている。国立公園に指定されている美しいふらさと、これほどまでに自然を破壊する開発計画があることを知り、生徒たちは「知らなかった」と驚く。



第19回天草環境会議（2002年）

『九州電力・苓北火力発電所』がもたらしたもの

天草下島北端の苓北町に、140万kWの石炭専焼の火力発電所計画が1977年に持ち上がった。かつては良質の無煙炭を生産する炭鉱の町であった苓北町も、エネルギー革命が進行するなかですべての炭鉱が閉山していた。町は諸手を挙げて喜んだ。しかし、石炭火電の先進地を視察したミカン農家や漁業者、そして長い炭鉱生活で塵肺患者となった人々は、「再び石炭で人間の命を奪われてはならない」と、毅然と反旗を掲げた。町は二分し、議会は機動隊を導入して火電誘致を強行採決した。これに対し、反対する会のM会長（塵肺患者であった）は覚悟のハリストに入り、帰らぬ人となった。その後、町長リコール闘争、裁判闘争と続いたが押し切られた。オイルショック後の国策もあり、苓北火電は1995年に1号炉が、2003年に2号炉が完成し、現在稼働している。

命をかけての反対闘争を押さえ込み、建設を強行した九州電力は、汚染防止には努力し成果をあげているが、大気や海水の温暖化防止はお手上げ状態で、漁獲の減少や魚種の変化が起きている。

『国営羊角湾閉め切り干拓事業』

天草下島南部にはリアス式海岸が発達している。その一画に羊の角のように深く入り込んだ羊角湾がある。この羊角湾の中ほどのくびれた部分を閉め切り、内側を淡水化し、さらに浅い部分を干拓地にするというのが『国営羊角湾事業』であった。諫早湾のミニ版だ。ここでもお金の問題で町は泥沼に陥った。1974年の工事開始直後に湾が濁ったため、漁民は漁船デモで抗議し、工事をストップさせた。その後裁判が続いたが、和解もならず、農業情勢の悪化の中で入植者の見込みも立たず、高価な水の需要も望めず、また熊本県が民意に反するアンケート調査結果を発表するという事態を招いた末に、1997年、国営干拓事業としては、日本で初めて中止になったのである。

その後もトラフグ養殖に使われていたホルマリンが原因と思われる、真珠貝の大量斃死があいついだり、湾奥にし尿処理施設の計画が持ちあがるなど、『呪われの海』といわれている。

破綻した『西武ゴルフ場建設計画』

天草下島の本渡市と五和町の境に位置する丘陵地帯に、天草では貴重な、地下水が豊富な場所がある。バブル末の1988年、時の細川知事の肝いりで西武が天草海洋リゾートの中核として、この地にゴルフ場を建設することになった。両市町が用

地を買収し、まとまった段階で西武に売り渡すことになっていた。しかし、「最も大切な地下水を農業で汚染されたり、水源涵養している森林を切り払い地下水そのものをなくしてはならない。洪水も発生する」と、100人を超す地権者のうち、30人が反対に立ちあがった。

立木トラストで多くの人と連帯した地権者は、その立場を強固にする。バブル崩壊後、やる気をなくした西武は、1998年ついに撤退した。地元自治体には多額の借金が残った。国日より、県日より、大企業だよりのリゾート計画の結末だった。

『本渡港マリンタウン計画』から干潟再生へ

海がなくなる。計画図を見てそう思った。マリンタウンとは名ばかりの「海をつぶして町をつくる」構想だった(1991年立案)。これは天草下島と上島が接する本渡市の沖合いに80haを超えて広がる砂質の前浜干潟のうち61haを埋め立て、5000t級の砂利船用の港湾施設と関連する工業用地を建設しようとするものだった。砂利の需要の伸びも工場の進出も期待できない状況で、隣町でも同様の3000t級の港の建設が進められていた。

諫早から山下弘文さ(故人)がすぐに来島、調査と講演で本渡干潟の重要性を訴えてもらった。砂リンピ



砂リンピックのイチリンビューの競技

ックでは市民も本渡干潟の素晴らしさを体験した。そして「この計画はおかしい」と、市民からも多くの声があがり、本渡市佐伊津漁協は漁業権放棄を否決した。やがて熊本県は見直しを表明。2000年の本渡市長選挙では反対派の候補者が当選、本渡干潟は守られた。ところが海の状況は悪化した。

諫早湾が閉め切られ、遠く離れた本渡でも潮の干満が潮汐表より30分も早くなった。マテガイやアサリも姿



本渡干潟のアサリ移植テスト

を消し、絶滅危惧種のイボキサゴやウミサボテンまでもが急減している。

昨年から本渡市と協力し、本渡干潟再生のための原因調査を始めた。さらに、諫早湾の閉め切り堤防の撤去をめざし、有明海沿岸の漁民や市民と連帯し『中長期開門調査』の実施を求めている。この夏には山下弘文さんが取り組んだ【有明海・不知火海フォーラム】を天草で開催する。

イルカやウミガメも人も生きる海に

前任校の牛深高校では、天草の環境問題の授業の後、夏休みの課題として【わが古里の光と陰】のテーマでレポート提出を求めた。牛深の海の汚れや埋立、水産業の不振の問題が多数報告された。生徒の具体的な声を受け、海の豊かさを取り戻し再びイワシ湧く海となり、ハイヤ(牛深はハイヤ節発祥の地)の賑わいを取り戻そうと、総合的な学習の時間で【ウミガメサポート大作戦】に取り組むことになった。

ウミガメが上陸する茂串海岸(昨年のNHKの大河ドラマ『宮本武蔵』で巖流島のロケ地となった)で、ウミガメの説明を受けた後、漂流物の清掃をするのだ。それが地域の話題となり、盗掘されていたウミガメの卵はその年は1個も盗まれなかった。出稼ぎに行った父ちゃんも、海で生きたい子どもも、悪い循環をよい循環に変え、天草の海を豊かな海にするためには、「知らなかった」ではすまないと考え始めている。